

著：川名 誠司・陳 科榮

皮膚血管炎

書評者：岩月 啓氏(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授・皮膚科学)

血管炎・血管障害の診断は皮膚所見が糸口になることが多い。経験を積んだ皮膚科医であれば、臨床像からその病変の病理組織反応を考え、いくつかの鑑別診断を想起できるが、確定診断には病理組織所見が不可欠である。本書は、臨床の視点から皮膚血管炎・血管障害を体系的に解説した専門書で、豊富な臨床像と病理組織所見を掲載した構成になっている。Chapel-Hill 分類や診療ガイドラインの解説書ではない。

本書の内容は、大きく総論と各論に分かれている。総論では基本的な血管の組織学的解説と疾患概念を明確に示し、多方面からの血管炎の成因についての考え方を示している。最新の研究を追いかけるのではなく、臨床医の視点でいかに診断し、病態を把握するかという原点に立ち戻った記載が印象的である。血管炎の診断の基本は、動脈炎と静脈炎の鑑別であるが、実はこれが意外に難しい。著者はかなりの頁を割いて、多数の病理組織所見を提示しながら、両者の鑑別点を解説している。各論では、一次性血管炎、二次性血管

炎や多様な血管障害を紹介しており、臨床の場で遭遇する血管炎・血管病変のほとんどを網羅している。Chapel-Hill 分類や既存の血管炎分類をはるかに超えた、詳細にして明解な内容で、かつ、成書の皮膚血管炎の病理解釈に物申す気概を感じる。

本書を読むと、これほど多種多様な血管炎・血管障害が皮膚病変として現れるのかと驚かされる。Chapel-Hill 分類では、皮膚 leukocytoclastic vasculitis としてまとめ診断されてきた観のある皮膚血管炎だが、実は臨床および特徴的病理所見の違いを読み取ると、おのおのにふさわしい診断名が付与され、病態が明確になってくる。本書は、ANCA 関連血管炎やさまざまな血管障害の最新知見や鑑別診断のポイントを紹介しつつ、それでも分類不能な皮膚白血球破砕性血管炎や歴史的な疾患名になりつつある Ruiter 型血管炎 (vasculitis allergica) や, hypersensitivity vasculitis (Zeek) にも言及しており、皮膚科医としては感慨深い。

皮膚科医が本書を読むと、記述

された診断名にうなずきながらそれらの臨床像や病理組織所見を受け入れることが可能であろう。非皮膚科医にとっては初めて目にする診断名に抵抗があるかもしれない。皮膚科用語は、「ガラパゴス化されている」という批判を受けることがある。しかし、本書の記載は、皮膚血管炎を他科と共有できる概念と用語で論じ、臨床像と病理所見というビジュアルな手法で解説されており、ガラパゴス化しつつある皮膚の血管炎概念を現代の医療水準で体系的に整理している。

本書を介して、皮膚科医だけでなく、内科医、病理医が、ともに納得のできる形で血管炎・血管障害の考え方を共有できると期待される。その結果は、治療とそのアウトカムに反映されるはずである。

● B5 頁 360 2013 年
定価 13,650 円
(本体 13,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-01010-8]
医学書院刊